

Title	千葉懸栗山川溪谷における貝塚の地域的研究：豫報
Sub Title	A study of the neolithic shell mounds in the Kuriyama valley, Chiba Prefecture (an interim report)
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.193- 230
JaLC DOI	
Abstract	<p>It seems to the writer that much progress has been made in the study of the neolithic age (Jomon Period) in Japan, but the details of the cultural features and changes in each small region have not yet been fully investigated. Accordingly the writer has taken up the Kuriyama Valley as a subject for detailed research and investigation. This Valley, which was a bay thirteen kilometres in length at the beginning of the neolithic age, had been gradually changed into land by the terrestrial upheaval and the alluvial accumulation. It has on both banks nearly twenty shell mounds constructed in old and new periods of the Jomon Culture and affords a favourable field for research. The study is still in progress, and the writer has so far obtained the following results.</p> <p>I. The culture traits of this region. (A) This region is extremely scanty of stone works, (the reason of which has been fully studied and discussed, but we have not yet come to the final conclusion). (B) Judging from the distribution of the earthenware of Shimoono type, it may be said that the culture had been brought along the coast to this region about the middle of the Jomon period. And it is also inferred, from the distribution of the earthenware of Goryoga-dai and Shomyoji type, that the culture had been brought to this region via the Izu and Boso Peninsulas.</p> <p>II. The food problems (A) In this region few bones of beasts and fish have been discovered. A considerable amount of vegetable must have been taken because the shell fish could not be sufficiently nutritious. People might have eaten the wild plants and it is also probable that they had agriculture of the most primitive stage. (B) This region faces the Pacific Ocean. But, judging from the kinds of the fish bones discovered in this region, fishing was done inside the bay, and not in the open sea. (C) The kind of shell fish varies with the periods : it has been realized that a certain specific kind was selected and supplied in each period. (D) Judging from the positions of the shell mounds and the fact that the shell fish (taken mainly as food) were obtained inside the bay, the writer thinks that the shell fish were gathered just near the shell mounds. Probably the shell gathering was the work for old people, women and children.</p> <p>III. Chronology and regression As all the shell mounds in this Valley consist of marine mollusca, it is quite probable that the sea extended into the depth of the Valley in the Jomon period. The more secluded the shell mounds are in the Valley, the older they must be, because the sea has turned into what it is by gradual regression. After examining the earthenware of this Valley on this principle, the writer could obtain almost the same chronology of the earthenware as had been established for the shell mounds along the coast of Tokyo Bay. The writer, therefore, believes that the chronology of the Jomon Culture along the coast of Kujukuri has been successfully established. The coast line in the earliest (or proto-) Jomon period seems to have been over the line of ten metres above the sea levels measured today. The height of the coastline in each period has been proved as follows :</p> <p>Early Jomon period.....8 ~ 10m., Middle Jomon period.....8m., Late Jomon period.....5m.</p> <p>Then the course of regression has been definitely disclosed, and the writer has succeeded in restoring the prehistoric topography in each period of the Jomon culture.</p>
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

千葉縣栗山川溪谷における

貝塚の地域的研究 (豫報)

清水潤三

昭和二十七年本塾大學院社會學研究科において千葉縣九十九里濱沿岸に於ける漁村の綜合調査が行われるに當り、筆者も古代漁撈の研究を分擔してこれに参加し、專ら低地に散在する諸遺蹟の研究を行つた⁽¹⁾⁽²⁾。ところが、調査の進捗に伴い、背後の丘陵地帯にも興味ある遺蹟が多く存在することが明らかとなり、低地遺蹟の性質を解明する爲に比較研究を行う必要があること、この機會に周邊地區の調査を実施するのが得策であることが痛感された。幸いにして松本信廣教授の賛同と強力な援助を受けることが出來たので、研究は順調に進み、すでに著るしい成果を擧げつつある。しかし尨大な計畫の下に、長期に亘る覺悟で着手した仕事で、栗山川溪谷の貝塚研究はその第一段階にすぎず、しかも完了しているわけではないから、全般から見れば初歩を踏み出したに止まるが、百年祭記念論文集の發刊を機に従來の知見を整理發表し、大方の批判を請い、併せて將來に資したいと思う。勿論個々の遺蹟遺物の詳細に關しては正式の報告書に譲る外はなく、研究成果の詳論も圖版類の豊富な使用を制限されている本稿では割愛せざるを得ないが、多くの資料を長く未發表のまま止めおくのも本意でない。この點も敢て筆をとつた所以である。なお本研究は本塾學事振興資金(昭

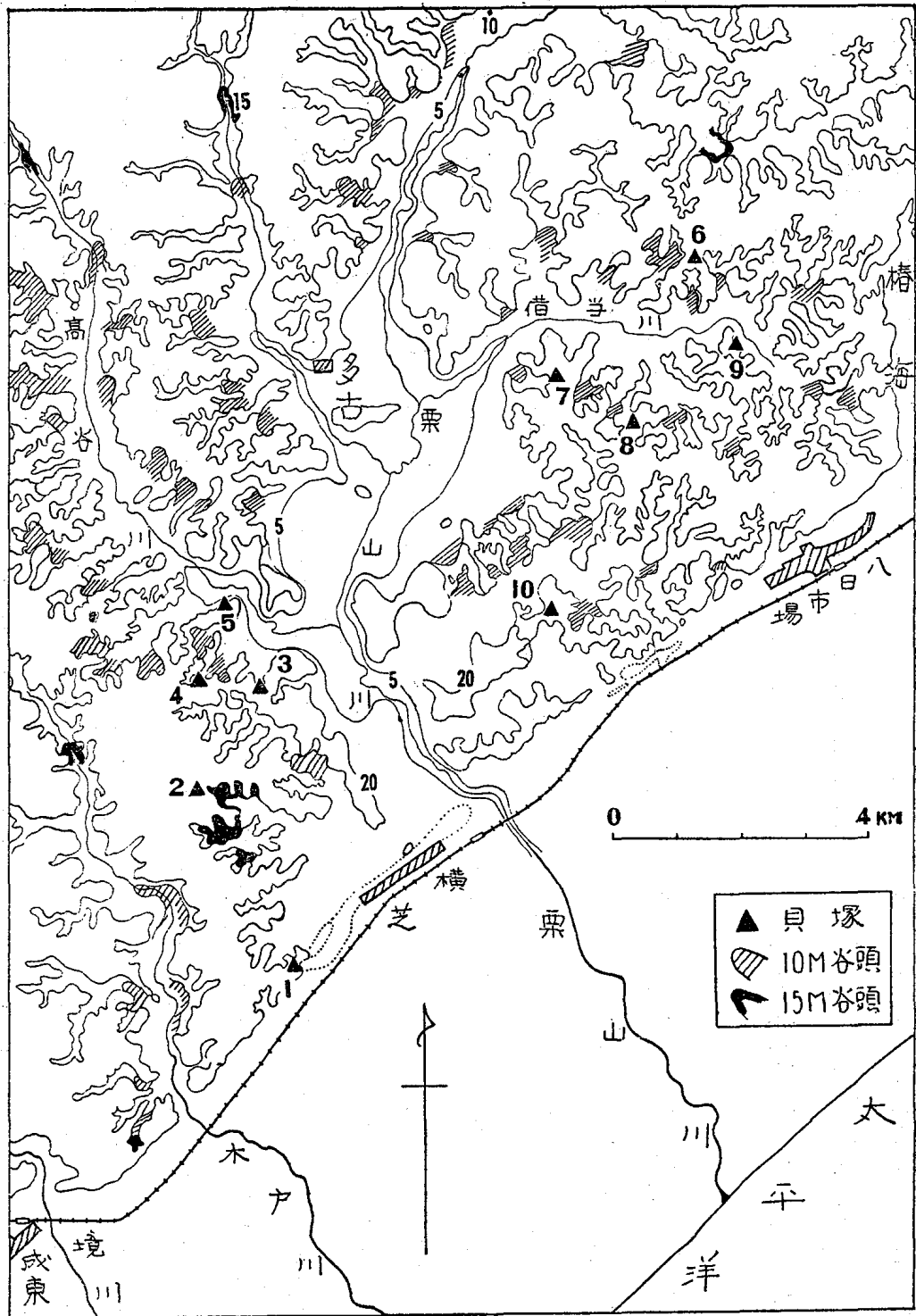
和二十八、三十一年度)を主とし、昭和二十八年度文部省科學研究助成補助金の一部、並びに九十九里調査委員會から受けた研究費をもつて實施したものであることを明記する。

註

- (1) 低地遺蹟の研究成果については「九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究(予報)」史學二七—四、に概要を記しておいた。
- (2) また同地域における古代漁業の研究は「九十九里調査委員會」から近く刊行される報告書に載せられる運びとなっている。

一、調査の目的

九十九里沿岸の古代遺蹟は大別して海岸沿いの低地帯に散在するものと、背後の洪積臺地上に位置するものがある。清水は松本信廣教授の獨木舟研究に従つて、昭和二十四年はじめてこの地方に足を踏み入れて以來、塾員鎗田欣治氏の献身的援助を受けることを得て、次第に知見を深めつつあつた。恰も九十九里漁村綜合調査が行われるに至り、引續き鎗田氏の助力と、それ以前に得た知識とを活用して一應の結果を収めることが出來たのである。⁽³⁾しかし低地遺蹟の研究が進むにつれ、それらは低地に定住的な生活を行つていた状態を示すものではなく、そこに遺蹟を残した古代の人々、特に繩文文化の人々の本據はやはり背後の丘陵地帯に求める以外にないことが知られた。海岸低地が今日ほど發達せず、砂洲と潟湖^{ラグーン}が點綴していた當時の地形から推して、それは當然の事實と解されよう。そこで低地遺蹟の研究は丘陵上の遺蹟を並行調査することによつて、初めて完璧を期し得るのである。ここに筆者が丘陵上遺蹟の調査を行う決意を固めた理由があり、昭和二十七年十二月鴻ノ巢貝塚の發掘に於いてその第一歩を踏み出したのであつた。



第1図 栗山溪谷主要貝塚分布図

- 1 猿尾 2 姥山 3 木戸台 4 鴻ノ巣 5 牛熊
 6 飯高 7 宿井下 8 八辺 9 大浦 10 貝塚

さて背後丘陵上の遺蹟は、多く解折によつて生じた大小の溪谷に面して營まれ、茂原附近、東金附近にも群集しているが、栗山川及びその支谷の沿岸に最も濃密に分布している。地域的な研究を行い、その場所に特有な文化の特性をとらえ、且つ編年的に文化の變遷を跡づけるためには、小範圍に多數の、しかも年代を異にする遺蹟が存在する地區を対象とすることが望ましい。幸い古くから土地の研究家によつて注意されていたものに、鎗田氏が新らたに發見した分を加えると、この溪谷周辺の貝塚は我々の研究目的を果たすに十分な數に上ることが知られ、その年代も縄文文化の早期から末期に及び、彌生式土器、土師器、須惠器を出土する遺蹟も見られて、最適のフィールドと認められた。そこで今日までの研究は本溪谷に集中され、先ず手はじめとして縄文文化の貝塚の研究を行っているわけである。

更に研究の目的は今日のところ、一應この溪谷に於ける縄文文化の全貌を明らかにし、最小單位の地域内に於ける縄文文化の特色を把握する點に絞られ、本稿はその問題についてのみ書かれているが、その結果を分析して、どこまでが縄文文化の一般的通有性であり、どこからがその地方的變異の姿であるかと言う、縄文文化研究の基礎的問題にまで及ぼうとする意圖を併せ持つものである。勿論この目的は、將來更に彌生文化以降の諸遺蹟研究にまで擴大される予定であるが、これまで十分な理論と準備の下に行われることなく打ちすぎて來たと思われる考古學の地域的研究に、一つの示唆を與え得れば幸いである。

さて栗山川溪谷はこの地方で最も大きいばかりでなく、谷内の標高も他に此して著しく低い。即ち五米等高線は谷口の横芝市街から十二、三杆の奥まで遡り、その中には低地遺蹟をも含んでいる。それ故往時は海水の浸入を見、複雑な海岸線をもつた奥深い海灣であつたものが、次第に隆起乃至は沖積の作用によつて現状に達したものと認められ、嘗て

大山史前學研究所が東京灣に注ぐ諸河川の溪谷において實施し、良好な結果を得た、貝塚を形成する貝類の相違に基く編年研究を試みるのに好適な條件を備えている。今回は右の研究法を採用し、編年研究を實施することが出來たのであるが、この點から、主として貝塚が今日までの調査對象に選ばれているわけである。そのほか低地遺蹟、獨木舟の出土状態も機會をとらえて調査されたが、それらについては別稿にゆづることとした。以上の目的が、いかに果たされつつあるか、以下の諸章において漸次明らかにしてゆくであろう。

註

(3) 1の報文参照。

二、調査の概要

さきに觸れたように、この研究は昭和二十七年十二月に行つた鴻ノ巣貝塚の調査をはじめとし、翌二十八年は低濕地遺蹟に全力を挙げたため中斷したが、二十九年には牛熊貝塚、三十年には八邊貝塚やっぺ、三十一年には姥山貝塚、三十二年に宿井下、飯高の二貝塚、計六ヶ所の貝塚を發掘した。これは本溪谷貝塚總數の約三分の一に止るが、主要な貝塚は一通り網羅されており、極めて小さい貝塚か、又はすでに破壊されて大きな成果を望み得ないものを除けば、三分ノ二以上の貝塚を調査したことになり、現地について表面的な觀察を行つていないものは一ヶ所も残されていないから、中間的な報告を公にすべき時期が來ていると云つてよからう。調査済みのものを次に一括表示する。

貝塚名	所 在 地	調 査 年 月	時 代	發 見 者
鴻ノ巢	山武郡横芝町(舊大總村) 中台	昭二七・一二	繩文文化中・後期	青木謹爾
牛 熊	山武郡横芝町(舊大總村) 牛熊	〃二九・一二	〃	鈴木正隆
八 ^や 邊 ^べ	八日市場市(舊吉田村) 八邊	〃三〇・一二	〃 中期	鎗田欣治
姥 山	山武郡横芝町(舊大總村) 姥山	〃三一・三	〃 中・後・晚期	清水浦次郎 鎗田欣治
宿井下	八日市場市(舊吉田村) 吉田	〃三二・三	〃 前期	鎗田欣治
飯 高	八日市場市(舊飯高村) 飯高	〃三二・三	〃 前期	日本石器時代 遺物發見地名表

これらは飯高を除くとすべて中央の學界に知られていなかったものであり、また悉くが正規の發掘調査を經ていない貝塚ばかりである。その所在地點を地理的にみれば

栗山川本谷右岸 一 姥山

高谷川支谷右岸 二 鴻ノ巢・牛熊

借當川支谷左岸 二 八邊・宿井下

同 右岸 一 飯高

となり、貝塚を形成する貝類の性質から分けると、

純鹹貝塚 八邊・姥山A・宿井下・飯高

主鹹貝塚 鴻ノ巢・牛熊・姥山C

となる。また土器形式から分類すれば、

前期 織維土器 八邊・宿井下・飯高

諸磯式 八邊

中期 下小野式 八邊

五領ヶ臺式 八邊

阿玉臺式 鴻ノ巢・姥山A・C

加曾利E式 鴻ノ巢・姥山A・C

後期 堀之内式 鴻ノ巢・姥山C

加曾利B式 牛熊・姥山C

安行式 牛熊・姥山Z

千網式 姥山Z

となつて一應前期の織維土器から末期の千網式に至る諸型式の土器が見られ、編年研究にも事かゝぬ。ただし早期の貝塚のみは未だ發掘を行うに至つていないため、後段において少しく觸れるに止めておく。

次にこれら諸貝塚の概要を記し、更に今日の段階に於ける研究の狀況へと筆を進めて行くこととする。

三、各貝塚の發掘とその結果

A 鴻ノ巢貝塚

栗山川に西から流れ込む一支流高谷川の溪谷の左岸、谷口に近く、大字牛熊の丘陵が突出しているが、その丘陵の東側に深く入り込んだ小支谷の奥に北向きの小さい斜面貝塚がある。當時の松尾高等學校教官青木謹爾氏の示教によつてその存在を知り、本研究の出發點となつたが、特に小字名をとつて鴻ノ巢貝塚と命名した。現地について觀察すると、斜面の貝層は更に臺上の平坦地にも及んでいたように見えるが、削平されて畑となり、すでに破壊されているらしい。この附近の貝塚は、ほとんど同様の厄にあつていて、我々の發掘はすべて斜面の部分を選ばざるを得なかつた。また栗山川の右岸では丘陵が概ね西に急に、東に緩い傾斜を示しているため、貝塚は丘陵の東側に營まれるのが通例であり、しかも北面する傾向があるのは著るしい特徴である。本貝塚もまたこの例に漏れない。

發掘は貝塚散布地域のほぼ中央部に斜面に添うて長さ五米、巾二米のトレンチを設けて實施した。貝層は厚さ六五乃至八〇糎、上部が混土貝層で四〇乃至六五糎の厚さを有し、下部は純貝層で一五乃至三〇糎の厚さを持つていた。混土貝層は斜面を降るに従つて厚く、純貝層は逆に上方が厚かつた。この二つの貝層は容易に區別し得るが、別に間層を挾んでいるわけではない。貝層を形成する貝類はチョウセンハマグリ、ハマグリ、シジミが最も多く、ダンペイキシヤゴ、アサリ（大形）、カキがこれに次ぐ。チョウセンハマグリは小形のもものが大部分で、稀に大形のものを含み、普通のハマグリよりやや多量であり、シジミは集團をなして存在した。

獸骨は比較的豊富でイノシシが最も多く、シカがこれに次ぎ、サル、タヌキ、などがあり、魚類にタイ、スズキが見られた。鳥類の骨も比較的多く出土している。

土器は表面採集によつて阿玉臺式數片をえたが、發掘によつては一片も出土しなかつた。また貝層内及び貝層下土層に加會利E式が僅かに發見されたが、大部分は堀之内式であり、表土、貝層、貝層下土層を通じて見出されたから、本貝塚を堀之内式の貝塚と稱して大過ないであろう。しかも上下二層の貝層を通じて、その間に層位を指摘することは出来なかつた。またトレンチの上端から三米ほど降つた部分にこれと斜交するU字形の溝狀部が認められ、この部分は貝層が特に厚く、多量の土器が密集していた。完形又は器形を窺い得る程度に復原し得たものは十個に及び、發掘面積に比して多かつた。これらは殆んどが貝層最下部又は褐色土層との境目に發見されている。また完形品並びに多量の破片を通觀すると繩文を缺き、太い沈線で不規則な文様を畫き、その中を刺突文で埋める手法が目立つている。また神奈川縣稱名寺貝塚出土の土器に近い特徴をもつものもある。器形にも變化が多く、球形の胴に大きく外反する口縁部を附し、口縁が強く波狀を呈するもの（第四圖3）や、頸部が緩く縮約され、胴の張りも弱く、背の高い深鉢（第二圖3）などがある。その他加會利E式に近いものもあるが、所謂堀ノ内II式乃至はそれに近似するものは見當らず、全般的に見て奥東京灣沿岸諸貝塚出土の堀之内式とはかなり相違するように見える。（第二圖3、第三圖3、第四圖3）右器は極めて乏しく、石皿破片二個を出土したのみで、自然石も輕石、片岩類、黒曜石の破片を認めたに止まつた。反對に骨角器はやや多く、製作も優れている。（第五圖1—6）骨鏃又は尖頭器五、猪牙斧、骨針各一のほかに、鹿の下顎骨の兩端を切り落し、齒のついたまま入念に研磨したものが出ている。顎骨の内腔に紐を通した一種の裝飾品であろう。

B 牛熊貝塚

前述の牛熊丘陵の突端に近い西北斜面に位置する。急崖に臨んだ畑地のはずれに少量の貝殻の散布が見られるが、發掘してみると現地表が平坦なるにも拘らず、貝層は三十度内外の急傾斜を示し、當時は斜面貝塚であったことが解る。また上方では傾斜が急に緩くなるが、貝層が突然途切れ、明らかに人爲的に破壊されたことが窺われる。恐らく臺上を地均しくて畑地とする際の仕業であろう。従つて本來は臺上の平坦部にも貝層がいくらか延びていたに相違ない。崖端に並行して長さ六米、巾四米のトレンチを設けたが、ほとんど完掘に近く、本來大規模な貝塚ではなかつたことが知られた。しかし土器片の散布は貝塚背後の臺上に特に濃密であるほか、臺地先端にかけて廣範圍に亘り、縄文文化後期の一大聚落が存在していたことを推さしめる。廣大な包含地の一隅に小貝塚が點在する状態は安行式の遺蹟に屢次例を見るが、これもその一例と見られ、他にも未發見の小貝塚があるかもしれない。なおトレンチの中央約二米平方は嘗て匝瑳高等學校生によつて發掘され、粗製ではあるが巨大な「ミミズク土偶」の頭部を出土している。

貝層の状態は約四五纏の厚さを有する茶褐色の表土下に五〇纏内外の少量の貝を含む黒土層があり、次に六〇纏の貝の少い混土貝層、五纏余の明瞭な灰層、四〇乃至五〇纏の貝の多い混土貝層、二〇纏内外の貝破片を含む褐色土層、次いでロームの順序となつている。表土とその下の黒土層は後世の盛土である疑いが濃く、主要遺物は多く灰層下の混土貝層に包含されていた。貝の種類はチヨウセンハマグリ、ハマグリを主體とし、ダンペイキシヤゴが多く、シジミ、マツカサガイのような淡水産のものが若干見られたが、鹹度はかなり高い。この點は特に注目を要する。

獸魚骨類は相當量が多かつた。獸類ではシカが多く、大形のイヌ、タヌキ、サル、及び種名不詳の大形海獸の顎骨な

どが目立つた。魚はスズキが最も多く、鳥骨も若干ある。これらの詳細については詳報に譲りたい。

土器は加曾利B式と安行I、II式であるが、出土量は極めて多く、特にトレンチ西部では大形の破片が重畳していた。貝層に灰層を隔てた上下二層が區別されたので、當然層位關係が注意されたけれども、上部混土貝層にも加曾利B式が多量に存し、下部混土貝層に安行式が見られないわけではなく、出土土器からは識別が困難であつた。従つて、慎重な検討の結果層位が存しない遺蹟であると斷じたわけである。破片が多量の割には復原し得た土器が少く、原形を窺い得るものが十二個に止まつたが、その多くは加曾利B式である。第二圖1、第四圖2の二個をとりあえず代表例として圖示しておく。

三個の土偶破片の中には「ミミズク形」の上半身を残すものがある。典型的なミミズク形とは云い難く、製作も稚拙の感を免れないが、赤色塗彩の痕跡を残し、肌は黒色を呈している。匝瑳高校の所藏品と相通ずる點が多い。

石器は九個で比較的乏しく、完形品は殆んどない。美しい小形扁平な定角式磨製石斧が特筆されるに止まり、他に敲石、磨り石、砥石などが見られる。軽石製品の斷片と覺しきものもある。(第五圖10)

骨角器はやや多量で、骨鏃、骨銚、浮袋の口などがあり、特に小形の尖頭器に鮮かな朱色の漆を塗つたものは重要な資料である。その他貝輪も八個發見された。

C 八邊貝塚

栗山川の溪谷は谷口から約十軒北に遡つた多古町の南で、東方に向けて大きな支谷を分歧している。即ち借當川支谷かしあてで、その南北兩岸は大小の屈曲が連續し、複雑極まる地貌を形づくつてゐる。八邊貝塚は借當川支谷左岸の松ヶ崎、長

岡の中間から南に入り込み、その奥が掌狀に分岐するやや大きな支谷の一端にある。あだかも八邊部落の人家が建て込んだ丘陵の北向き斜面にあつて脚下に小谷を見下しているが、その小谷は貝塚から一五〇米ほどの所まで十米等高線が入り込み、築成當時の海岸線がほど近い所に存したであろうことを推さしめる。なお丘陵反對側の東側にも一坪足らずの小貝塚があり、下小野式土器の破片を少量包含していた。

さてこの貝塚は急崖を切り開いた巾十米余の細長い平坦部に貝層を露出し、古くは臺上人家の宅内まで延びていた疑いがあるが、屋敷境に土壘が築かれたり、宅地内は深く削り取られたりして、舊狀を著しく損じている。發掘した平坦部にも嘗て納屋が建てられていたと云い、雞の飼料として貝殻が大量に掘りとられたと云われ、その痕跡を隨所に窺い得る。それ故貝層の殘存部分は極めて少く、縦横六米の凸字形を合せた形のトレンチによつて、作業可能の部分は完全に消滅するに至つた。

發掘の結果明らかにされた貝層の状態は次の如くである。臺上に近い個所は人工によつて削られ、上部の混土貝層が露出に近い状態を示す部分もあるが、斜面に近づくると黑色表土を被つた、厚さ約三〇糎の混土貝層があり、その下に七〇乃至八〇糎の純貝層、更に貝層下黒土層の順となつてゐる。黑色表土層の現地表はほゞ上面平坦で急に斷崖となるが、貝層はそれより、二米五〇糎内側で四十度近い急傾斜を示すから、現在の表土は平坦地を切り開いた際の人工による盛土であることが明らかである。

貝類は小形のオキシジミが斷然多く、他の諸貝塚に比して異色がある。これに次ぐものは小形のカキとアサリであるが、貝層の下部にカキが増加しているものの、オキシジミとは比較にならぬほど少量である。ハマグリ、チヨウセンハ

マグリは發育不良の小形のものが少量見られるのみであり、ダンペイキシヤゴが稀に發見された。かような貝類相は純鹹貝塚でありながら、外洋性の種に乏しく、よく本貝塚の立地條件に適つたものと云える。

貝層が上下の混土貝層と純貝層とに分れ、貝層下部ではカキが増加するなど、その間に變化が窺われる上に、出土土器に下小野式と五領ケ臺式が見られたので層位關係には慎重を期し、特にトレンチ東端のA11區では笹津備洋君を煩わして詳細な觀察を行つた。しかし發掘當時において混土貝層に下小野式、純貝層に五領ケ臺式を多く出土するように見えたほかは、貝層の變化と出土土器の相違が對應するような徵證は全く認められず、兩型式の土器が層位をなす事實は遂に確認し得なかつた。微量伴出した諸磯式、纖維土器も特に下層にのみ見られたとは斷じ得ない。この事實が數種の土器が同時に並存したものか、急斜面の貝塚であるために堆積の不均等が生じた結果であるのか、輕々しく斷定すべきではなからう。

獸魚骨は甚だ乏しく、シカ、イヌ、タヌキなどを檢出し得たに止まつた。魚類ではエイの齒が出土している。種名の同定し得ていないものがかなりあるが、獸魚骨の絶對量が少量である事實は本貝塚人の食料を研究する上に、特に重要な問題とならう。

土器はさきに觸れたように纖維土器、諸磯式も見られたが、微量で小破片にすぎず、主體をなすものは下小野式と五領ケ臺式である。復原し得たものは七個に上るが、下小野式の典型ともいふべき單純な深鉢形を呈し、繩文に綾絡文を加えた裝飾を施すものは、極めて大形の土器が多かつたらしく、大破片が多く發掘されているにも拘らず、ついに復原し得たものがない。特記すべきは第五圖1—3に圖示したような、筒形の底部に張りの強い胴部をのせ、更にカラー狀

の口邊を附した特徴ある器形を示す土器である。江坂輝彌君が山形縣吹浦遺蹟の報告書において論じたように、大木6式に類品を見るが、關東地方でははじめての發見であろう。野口義麿君によると、破片としてはこれまで數ヶ所の遺蹟から發見されていたらしいが、ここに完形品を得ることが出來たわけであり、同時に下小野式土器が大木系統の東北地方南部の繩文式土器と密接な關係にあるとする説を裏付けるものと云える。しかも1が繩文と綾絡文を有するのに對して、2と3は五領ヶ臺式の文様で飾られている點も輕視しがたく、系統を異にする二つの土器型式の融合したかたちと見るべきか否か、なお慎重な検討を要すべき興味ある事實と云えよう。その他に第三圖2に示したような小型土器も出土している。

また本貝塚には阿玉臺式土器が出土しないのも面白い。直距離にして約十三軒北方の霞ヶ浦に臨む小見川町雷貝塚では下小野、五領ヶ臺、阿玉臺三型式の土器が出土し、西村正衛氏は阿玉臺式を最も新らしい土器と編年している。この八邊貝塚が果して雷貝塚の阿玉臺式を出す貝層に先立つて營まれたものであるか否かも、重要な課題である。下小野式の標式遺蹟である下小野貝塚も、栗山川の溪谷を極限まで遡り、巾の狭い臺地を越えて霞ヶ浦斜面に出た所にある。また栗山川溪谷には他にも一ヶ所同種の未發掘貝塚があり、この霞ヶ浦と九十九里海岸とに挟まれた地帯が、この型式の土器の繁榮した中心地帯であるかもしれない。しかも銚子市の栗島臺遺蹟や、發表の自由を持たない二、三の遺蹟をも加えて考察すると、この地域の中期繩文文化には他に比して著るしい特色と、複雑性が認められ、ひとしお研究の興味を唆られるのである。

次に今次の調査で石器は二個しか發見されなかつた。石器の少いことは栗山川溪谷諸貝塚の一般的特徴とも見られ、

自然石も甚だ少量である。この事實は附近に石材が乏しいという環境に左右された結果かもしれないが、同時に生活のために、それに代るべき、いかなる器具が用いられたか、重大な疑念を懐かせられるのである。また平凡な磨石一個を除いた他の一個の石器が、良質の黒曜石で作られた三角形の石篋様小形品であるのも面白い。黒曜石が交易によつてもたらされたことは疑いなく、その形態が東北地方に多く、關東地方には稀な石篋に近似している點も注意を惹くのである。(第五圖9)

骨角器は四點出土した。しかし粗製骨鈹、粗製尖頭器各一と裝飾品二個に止まり、種、量、質ともに石器の缺を補うに足るものとは思われない。(第五圖11)

要するにこの八邊貝塚は研究上とかく問題の多い中期前半の遺蹟として注目するに足るものであり、新らたな課題を投じた點も少くないから、やや詳しく記述した。しかし更に整理、研究を續けた上で、纏つた報告を公にしたいので、要點のみに止めておく。

D 姥山貝塚

姥山貝塚は嚴密な意味では栗山川溪谷の貝塚とはなし難い點もある。即ち栗山川右岸の谷口は横芝町坂田の丘陵によつて限られており、姥山貝塚の位置する丘陵は栗山川右岸の臺地ではあるが、脚下の谷は直接九十九里低地に口を開いているとも云えるからである。ところが、なお詳細に檢すると、松尾町猿尾さゝこの丘陵端から北東に伸びる砂丘は横芝の市街に達して栗山川の右岸に迫り、背後に廣い低地帯を包んでいる。この平坦な水田地帯は標高十米以下で、恐らくかなり近い頃まで、栗山川の流路を含めた潟湖を形成していたと考えられる。松尾町岩井崎から彎入する姥山貝塚の谷はこ

の潟湖に開口しているから、これを栗山川溪谷の貝塚群に含めて考えることも、地理的に許されてよかろうと思う。さて貝塚はこの一小谷の最奥に近い丘陵上にあり、谷口から約一・五軒、谷の標高は出口附近で十米、貝塚脚下で十五米弱となつてゐる。

本貝塚は栗山川溪谷の貝塚中で最も規模の大きいものであり、七又は八個の貝塚から成る「貝塚群」である。筆者が發掘したのはその中のA、C、Zと命名した三個の貝塚で、他の貝塚は極めて小規模なものにすぎぬため將來の精査に譲つた。以下貝塚毎に所見を記しておく。

(一) A貝塚

臺上中央部にある。貝殻の散布は最も廣い。南北六米、巾二米のトレンチを設けて發掘したが、厚さ二〇糎内外の黒色表土下に、五〇乃至六〇糎の混土貝層があり、三〇糎余の貝層下土層を隔ててロームに達する。貝塚の周邊部を發掘したと覺しく、貝層は良好でなく、中心部は道路で破壊されているらしい。従つて出土遺物にも見るべきものが乏しかつた。

貝層を形成する貝類は小形のチヨウセンハマグリが最も多く、アサリが等量に近く見られ、ダンペイキシヤゴがこれに次ぐ。またかなり廣範圍にシジミとダンペイキシヤゴから成る層が認められた。土器は加曾利E式が主體をなし、貝層下土層には阿玉臺式が多く發見されている。獸魚骨の出土は中等量、シカ、イノシシが最も多い。

土器は復原し得たものがなく、加曾利E式には特記すべき特色がない。阿玉臺式には加曾利E式に近いものが多い點が注意された。土器以外の石器、骨角器なども多からず、平凡な結果に終つてゐる。

(4) C貝塚

急崖に直面する臺地上に帶狀に分布し、脚下に前記の谷の小彎入部が迫っている。北東に向いた貝塚であり、約二十度の傾斜を持つ斜面貝塚である。また臺上平坦部は畑地を作るために古く破壊された形迹があるなど、前述の鴻ノ巢、牛熊、八邊三貝塚と規を一にしている。防風林が邪魔になり、連続したトレンチを設け得なかつたので、崖端に並行して、約二十米の間に二米四方のピット五個を掘つて調査した。

貝層の状態は各地點によつて多少異なるが、最も典型的なC1地點を採ると、上から順に表土(厚さ二〇乃至三〇糎)第一純貝層(十五糎)、第一混土貝層(三五糎)、第二混土貝層(三五糎)、第二純貝層(二五糎)、第三混土貝層(二五糎)となり、以下一米二〇の黒土層を隔ててロームに達する。包含された土器は第一混土貝層までが堀ノ内式、第二混土貝層と第二純貝層は加曾利E式に阿玉臺式を伴い、第三混土貝層には阿玉臺式が多く、加曾利E式を伴うように観察された。また第三混土貝層のみはダンペイキシヤゴを主とし、それより上層では小形のチヨウセンハマグリが最多で、ダンペイキシヤゴ、大形カキ、ハマグリ、などをまじえ、最上層にはシジミを伴うなど、貝類相に多少の相違が認められ、更に同じ混土貝層でも、第一と第三は黒色土を混ざるのに對して、第二混土貝層は褐色土を混じているなど、土器の變化と相應するものがあるのは特記すべきである。かように土器と地質、更にファウナの差異が相應するかに見える以上、阿玉臺、加曾利E、堀之内三型式の層位が存したことを認むべきであろう。C1區の北に隣るC2區でも堀之内と加曾利Eの層が一應區別され、C1區の南に並ぶC11區(發掘中はE區と假稱)でも上層に堀之内、下層にダンペイキシヤゴを主とする阿玉臺式の包含層が認められ、右の層位關係を裏づけている。またC11區より更に南へ一・五

米の間隔で設けたC12區(發掘中はD區と假稱)では堀之内層が下層となり、土器の極めて乏しい薄い純貝層を隔てて、加會利B式の包含層が上層に現われていた。この兩層を比較すると、加會利B層の主體をなすチヨウセンハマグリが徑一・五糎という甚だしく小粒のものであるのに、下層の堀之内層では五糎内外で、やや大形であることが觀察されている。また各區を通じて堀之内層、加會利B層にヤマトシジミが現われていることも看過し得ない。この事實は近くの溪谷から海水の後退したことを示すものであろう。またこの貝塚が中期から後期に亘る相當長期間繼續的に築成されたことも明らかである。

土器は既に繰返し述べたように、阿玉臺、加會利E、堀之内、加會利Bの四型式が出土している。未だ整理が完了していないので、今後増加する可能性があるが、堀之内式三個、加會利B式十個が復原されつつある。特に堀之内式土器は鴻ノ巢貝塚ともやや異つた特徴を持つもののように、精査の完了を期待している。ここには既に復原完了したものを圖示しておく。(第四圖1・4)なお發掘によるものと、附近から土地の子供達が採集した土器片中とに、所謂堀之内II式の破片が各一個検出された。従來この地域からは明瞭な堀之内II式が發掘されて居らず、諸所の蒐藏品中にも見出していないかつたので、特に附記しておく。

石器は完形の磨製石斧、凹石、石鏃など九個が發見され、他の三貝塚に比して多かつたと云えるが、これも他の地域の遺蹟と比べれば少量であり、本溪谷にある貝塚の共通な特色を示している。

骨角器には裝飾品の類が比較的多く、鹿角を用い、基部の頂點から一側にかけて彎曲した一孔を穿つたものは、C11區の堀之内層の出土品であるが、類例を市川市の堀之内貝塚、茨城縣の椎塚貝塚などに認め得るものである。スズキの

頰骨に一または三個の小孔を穿つたものが二ヶ出土しているのも珍らしい。他に牙斧二個、鯨骨製庖丁形骨器などが出ている。牙斧は堀之内式、鯨骨製品は加曾利B式土器に伴つた。(第五圖7・8)

表面採集ではあるが、緑色の石を用いた白玉もある。

なお獸骨は相當量出土し、シカ、イノシシを主とするが、タヌキ、アナグマ、ウサギなども見られた。魚骨はさほど多からず、整理未了であるが、外洋性の種に乏しいことは確實である。

(自) Z貝塚

臺上の緩斜面にあつて、北から入り込んだ別の谷の谷頭に面している。五×二・七〇米の凸字形をなすトレンチを設けて調査した。前記A貝塚周縁の地表には相當量の安行式土器片が見られるので、どこかに同式土器の包含層があるものと思われたが、小川文雄氏の好意により、表面の觀察では指摘し得ない本貝塚の存在を知つたのである。A貝塚との距離は二五米にすぎない。

地層の状態を検すると、二〇乃至三五糎の表土下に三〇乃至四〇糎の黒褐色土層があり、一部は眞赤に焼けた焼土層となつている。その下に五〇糎内外の貝層があり、この貝層下底は直接ロームに接している。しかしこの貝層はハマグリ、ダンペイキシヤゴを多く含み、小形のハイガイを混じえている點が注意されるが、總じて貝の量は僅少であり、保存状態も悪く、貝塚とすることに多少の疑念を懐かせられる程度のものである。また黒褐色土層の下部には貝とは逆に、保存の良好な獸骨、特にシカ、イノシシの完形に近い顎骨が多量に包含されて居り、骨塚の觀を呈した。土器は黒褐色土層と貝層とが主要包含層と思われたが、安行式(I・II・III各型式を含む)を主とし、これに相當量の千網式を混じ、

加曾利B、加曾利E、阿玉臺の各型式の破片が少量ながら無秩序に混在して發見された。それ故、この包含層が相當攪亂を受けたことは明瞭で、層位的に文化層を形成しているものとは認め難い。

出土遺物は、土器では千網式の大形淺鉢が完形に復され、(第二圖2)同式の壺形土器(第三圖1)と深鉢形土器が器形を窺い得る程度に復原されたほか、土偶破片、磨製石斧、磨り石、有孔石皿、骨筭、骨篋などが出土している。

上述のように、このZ貝塚は層位關係を明らかにし得ない上に、ほとんど完掘に近く、遺憾の點が多く残されたが、九十九里沿岸地方にも千網式土器の分布することを確認し得た點に大きな意義が認められ、その量も比較的多いところから、今後の形態學的研究の結果に大きな期待が寄せられるのである。

E 宿井下貝塚

借當川支谷の谷口に向けて、南から突出する丘陵に彎入する小支谷の末端にあり、谷頭の西側の緩い斜面に巾二米に滿たぬ帶狀に貝層が斷續している。極めて小規模な貝塚で六ヶ所のピットを設けて發掘したが、厚さ最大五〇糎の混土貝層が見られるのみで、しかも貝の量が少く、貧弱な貝塚である。小形のカキが主體となり、中等大のハイガイがほぼ等量見られ、小形のハマグリがこれに次ぎ、チヨウセンハマグリもいくらか見られた。獸魚骨は甚だ少いが、シカ、イノシシ、クロダイ、タイが出土した。土器は前期の纖維土器で、黒濱式に屬するものが大部分であり、關山、諸磯兩式土器が微量に混在していた。すべて小破片で出土量も著しく少い。土器以外の遺物は皆無である。

F 飯高貝塚

借當川支谷中央部の北岸にある一小支谷の奥端に位置する。飯高寺山門前の道路端と、その下の畑とに、傾斜の強い

貝層がわずかに残存しているが、寺の建立、道路の開鑿によつて破壊された部分も少なからず、本來は比較的大きな貝塚であつたらしい。未だ發掘の機を得ていない大浦貝塚と共に、本地区の貝塚中では珍らしく古くから知られ、「日本石器時代遺物發見地名表第五版」に載せられているが、正規の發掘は行われていなかつた。

發掘可能區域が僅少のため、道路端に二米平方のA區、畑地に二×五米のB區を設定調査した。貝層の状態は、A區では四〇乃至七〇糎の攪亂された層の下に、厚さ六〇糎ほどの混土貝層が残存し、一部には純貝層と稱してよい部分も認められた。B區では四〇糎の表土下に厚さ八〇乃至九〇糎の混土貝層があり、A區同様一部に純貝層と稱すべき部分が認められた。しかし、これは層位的に見られるわけではない。また地層はA、B兩地區とも10°乃至25°の傾斜を示し、斜面に營まれた貝塚であることが知られた。更に兩地點とも貝類相は同様で、カキを主とし、中等大のハイガイがこれに次ぎ、ハマグリ、アサリがやゝ多く、チヨウセンハマグリの大形のもものが時に目についた。少量ながらダンペイキンヤゴも混じている。

獸魚骨も量は少い。哺乳類ではイノシシ、シカ、魚類ではタイ、クロダイ、スズキがあり、微量とは云え、イルカ、マグロ、サメのような外洋性の動物が見られたのは興味深い。

土器においてもA、B兩區に差異はなく、共に前期の纖維土器であり、黒濱式に比定されるものである。出土量はやはり少いが、宿井下に比すればやゝ多く、大形の破片も皆無ではない。

土器以外には乳棒狀磨製石斧、磨り石、骨筭の頭部斷片、貝輪各一個が出土したのみである。他に自然石五個を發見した。

四、研究成果の概要

前述の六貝塚の發掘調査結果に加えて、實地踏査を終えた十三個の貝塚に於ける所見を加え、今日まで研究を續けて到達し得た成果の二、三について、ここに概要を報告しておきたい。ただし、研究はなお續行中であるから結論を得たものはなく、今後の改訂を要すべきもの、單なる問題の提起に止まるものさえ含まれている點を、重ねて明らかにしておく。従つて本稿によつて直ちにこの研究を評價されることなく、懇切な示教を垂れ、將來の完成に導かれんことを願うものである。

(1) 文化に現われた地方相の問題

(A) 發掘調査によつて出土する石器は、關東地方においては必ずしも多いとは云えない。しかし、今回の研究を實施した栗山川溪谷沿岸地區に於いては、より以上に石器の數量に乏しいことが確實視される。學校とか個人の集拾品を見ても、遺蹟の表面採集を行つた結果も、その特色を裏づけている。また遺蹟に於ける自然石の數も著るしく少量である。このような事實は特に本地區の周邊が、利用に堪える岩石に乏しいという、特殊な地理的環境に支配されていたと考えれば、一應の納得がゆくわけであるが、その場合は多くの石器が交易によつてもたらされたか、又はその原料を他から入手したに相違ない。しかし、日常生活を顧みると、絶對量の不足が何等かの形で補われた筈であり、一應考察を加える餘地があるかと思われる。

さて、石器の供給が不十分な場合に於いて、それが生活に必要な最低線を維持し得る場合には、ともかくその状態に

甘んずることもあり得るが、別に石器に代るべき他の原料によつて作られた同目的の器具によつて補われ、生活を豊かにする方途が講ぜられて然るべきであろう。例えば鏃の如きは骨角牙製のものにより、或いは木、竹の類を利用することによつても容易に補い得る。特に後者の場合は今日の考古學を以てしては、殆んど存在の有無を確認し難い種類に屬する。しかし、斧の如き利器は、金屬器を除いては代用に供すべき原料が他に見當らない以上、今日我々が手にし得る石斧をもつて、未發見、乃至は失われたものを論外として、一應その全部と考える外はない。

また眼を骨角器に轉ずると、これも特に豊富であるとは稱し難く、特に石器の缺を補うに足るほどのものがない。これらの乏しい證左から直ちに結論を導こうとは思わないが、この際、骨角器の中には小形の尖頭器が比較的普遍的に見出されて數少い石鏃を補つたかと思われること、石斧が石器の中では最もポピュラーであることは興味がある。交易によつて入手した石材は主として石斧製作に使われたか、若しくは既製の石斧を優先的に購入したと推定し得ないであろうか。このような石器の多少に關する疑問は、實は本地區の研究に當つて特に氣づいたことではない。東北地方では年代の前後を問わず、夥だしい石器を出土する遺蹟が大部分であり、南關東の貝塚のそれとは比較にならない。その原因がどこに存するかは、今後の重要な課題とさるべきであろう。今回の研究の對象とされた九十九里地方では、更に南關東の一般の貝塚よりも乏しく、また石器に代り得る骨角器を見ても、東北地方より格段に數量の乏しいことが確實であるから、生活の内容から考えれば、東北地方の人々が一段と豊富な内容を保持していたことになる。この點は直ちに主肯しがたいが、また直ちに納得し得る別の説明も發見出來ないのは不思議である。筆者は今直ちにその疑問に答へ得ないが、この機會に生活用具の多少という問題に讀者の注意を喚起しておきたい。⁽⁴⁾單に原料入手の難易とか、代用品に

よる補充などの検討に止まらず、生活内容の豊かさが新しい文化を進める原動力と考えられるからである。

註

(4) 土器の數量の多少も、これと關聯していると思われるが、ここでは觸れずにおく。

(B) 土器の相違が直ちに文化の相違と合致するという見解に對しては反對せざるを得ないが、慎重な配慮の下に、土器の著るしい特徴を通じて文化の系統を辿ることは可能であろう。この地區においては、その試みを許容する二、三の例に恵まれていると思われる。

第一に八邊貝塚に見られた下小野式土器は、東京灣周邊の貝塚においては存在が顯著でない土器であり、筆者の研究を續けている北部霞ヶ浦周邊の貝塚にも殆んど出現していない。しかも霞ヶ浦南岸の香取郡下に集中的に發見され、本地區のものも、山一つ隔てたそれらの遺蹟と結んで理解さるべきものである。またその特徴が仙臺周邊の大木式土器のある者に近似するからには、當然東北系統の傳播と解さざるを得ないであろう。その詳細な分布は筆者に明らかでないが、その經路が海岸沿いにあるならば極めて興味が深い。

また五領ヶ臺式土器も八邊貝塚において多量に出土したが、この土器の主要な遺蹟は相模灣系に屬する五領ヶ臺貝塚から、房總半島突端の加茂、三浦半島の鎌倉市葛原ヶ岡神社參道、銚子市の粟島臺遺蹟など、本地區の八邊貝塚を挟んで海岸沿いに分布し、霞ヶ浦南岸に及んでいる。その半面東京周邊の諸貝塚にはこの種の土器を主體とする貝塚は見られないようである。もちろん東京都犬目遺蹟とか、山地に近い部分には顯著な遺蹟が認められるようであり、關東地方の霞ヶ浦西北部にも影響が指摘されているが、一應海岸地帯に分布が著しく、従つて相模灣—三浦半島—房總半島—九

十九里という海上交通による傳播經路を推定し得るのではあるまいか。

更に鴻ノ巢貝塚出土の堀ノ内式土器の一部には、三浦半島稱名寺貝塚の稱名寺式土器に近似するものがあり、姥山貝塚出土の土器も相似た特徴を持ち、堀之内貝塚を初めとする奥東京灣周邊貝塚出土の同式土器との間に、著しい差違を見出すのである。この堀之内式土器に現われた地方色と本地區の地理的位置とを併せ考へる時、前述の海上を飛び石傳いに進む交通線の存在を考慮したくなる。推論の當否を無視した大膽な記述を敢てしたのも、一に小地域に於ける徹底した調査研究が各地に於いて行われ、纏め上げられたならば、この問題に新たな進路を見出し得るかもしれぬと考へた爲に外ならない。(脱稿後早稻田大學によつて安房鉞切洞窟から相似た土器が多量に發見された。)

最後にこの地區には中期において、阿玉臺、下小野、五領ヶ臺、加曾利Eの互に著しい特徴をもつ型式の土器が複雑な組み合わせをもつて存在して居り、八邊貝塚の出土土器中には、下小野、五領ヶ臺兩式より分離される可能性のある土器片も認められる。これが一本の系統に編年さるべきものでないことは、最近の研究に中期の土器をもつて阿玉臺、五領ヶ臺の二系統から成るとする修正説が現われたことから見ても、敢て不當な想定ではなからう。前期から中期にかけて土器の上にもヒアトスが認められ、一般文化の上にも大きな變動が現われているが、その背後に民族移動の如き何等かの歴史的な事實の存在を窺い得るのではなからうか。試みに記して今後の検討に俟ちたいと思ふ。

なお宿井下、飯高兩貝塚出土の纖維土器も一應黒濱式としておいたが、二三の顯著な特徴が認められる。これら土器の特色がどこまでこの地區独自のものであるか否かは、更に細部に亘る研究を終つた上で公表する予定である。

註

(5) 民族學者の中には岡正雄氏のように、中期の文様をメラネシヤのそれと結びつけて考える人さえある。「日本民族の起源」平凡社昭和三十二年。

(2) 食料に関する諸問題

(A) 牛熊、姥山(C12區)のように加曾利B式の遺蹟は獸魚骨を大量に出土しているが、その他の諸貝塚ではあまり多からず、八邊貝塚や前期の宿井下、飯高兩貝塚では特に乏しかった。勿論このような前期中期に獸魚骨が少なく、後期に至つて急増する傾向は一般的なものであり、後期にあつても堀之内式の貝塚においてはあまり多量でないのが通例のようである。しかし極端に乏しい前期の人々が果して主食を貝類に求めていたものかどうか、疑問とすべきではなからうか。貝類を主食して、果して營養を充實し得たであろうか。大山柏氏は嘗て、大山史前學研究所で實施した數多くの貝塚發掘の所見から、前期の人々が特にカキを好んで食用に供したことに注目され、カキは貝類の中でビタミン、グリコーゲンなどを含み、營養價の最も高いものであるから、これを主食にしても生存し得た可能性があると説かれたことがある。その當否についても、最近の進歩した關係諸科學の成果に照らして、更に検討すべきであろう。又後期の貝塚が多くハマグリを主體とすることに關して、大山氏は獸魚肉の供給が増加し、營養の補給が増大した爲に、營養價に乏しいハマグリでも差支えなかつたのであると説明された。しかし、この地方の堀之内式の貝塚に見るような獸魚骨の出土量から見ると、右の説明によつては十分納得が行きかねるのである。

筆者の研究はこの點についても、なお十分な成果を擧げるに至つていないが、食料の充實という點から見ると、

獸魚肉、貝類以外に何等かの常用食料があつたとすれば、これは當然植物質に求めざるを得ないと思う。人類の齒牙、消化器官が雜食性を示している以上、いつの場合においても、植物質食料が存在したことは疑いないが、このような根本問題を打ち出すまでもなく、遺蹟から比較的しばしば發見されるクリ、クルミの類が、蛋白質、脂肪を多く含有し、相當程度獸魚肉の不足を補い得たのではないかと思われる。特に後期に至つては、何等かの原始農耕が出現した可能性も皆無ではないのである。更に縄文文化人の生活は貝塚築成に主力が注がれたわけではなく、むしろ貝塚は海岸地帯の特殊な生活者の遺蹟であつて、數から云えば普通の包含地が10：1に近い比率を示している。貝塚分布地域にあつても、なお多數の包含地が存在する事實は更にこの問題を複雑なものにする。何故そのような現象が生じたのであろうか。貝塚築成の有無は食料と密接な關係があつた筈である。このような觀點からも、縄文文化の食料は更に積極的に検討を要すべきものと信ずる。

(B) 次に各貝塚出土の魚骨から得た知見に觸れておこう。研究着手の當初においては、この地域が今日イワシ漁の中心地であり、外洋に直面しているところから、貝塚築成者も優れた漁者であり、外洋性魚類の多獲が想像され、その點に興味と期待がかけられていた。然るに調査の進展に伴つて予想は全く覆され、魚骨の量も特に多からず、漁具の著るしい發達も見られず、捕食した魚の種類はタイ、クロダイ、スズキが壓倒的に多くて、内灣沿いの貝塚と異るところがなかつた。勿論外洋性の魚類の遺骸も散見し、海獸骨の發見もあつたが、數量は微々たるもので、偶然捕獲した程度を出るものとは思われない。従つて彼等の漁撈は栗山川溪谷内において行われ、外洋に進出することがなかつたと斷じて誤りがなからう。この特筆すべき成果に關しては、近刊の慶大「九十九里委員會」の報告書にやや詳しく記してお

いたから、併せ参照されんことを希望する。

(C) 貝塚によつて、特に年代の新古によつて食用に供された貝の種類に相違がある點は前述したが、その選擇が單に附近の地形や、榮養價による必然性に左右された許りでなく、他の要素、即ち例えば嗜好の如きものに基いた疑いのある點は注意をひく。その好例が今回の調査によつて知られた八邊貝塚における事實であつて、この貝塚の貝層は大部分がオキシジミの貝殻によつて形成されている。竹下次作氏の示教によると諸磯式の貝塚には往々オキシジミを主體とするものがあるとのことであるが、この貝塚もそれと規を一にし、何等かの事情でこの貝を選擇捕食したに相違ない。當時この貝塚の周邊にオキシジミばかりが棲息していたわけではなからうから、これはどうしても採集の際、嗜好によつて選擇が行われたとしか思われない。前期貝塚のカキ、後期貝塚のハマグリもまた同様であろうかと思われる。本地區でも宿井下、飯高兩前期貝塚はカキを主體とし、牛熊、姥山などの後期貝塚はハマグリを主としてゐる。また、姥山貝塚におけるダンペイキシヤゴと阿玉臺式土器との關係も、後期に往々見られるキシヤゴより成る貝塚の如きも、やはり捕食に當り、特別の選擇が行われた證左であろう。何故このような嗜好が、ある時期に限つて現われたのか、大山氏の説くように、他の食料との比率の變化によるものであるか否か、我々はもつとこの疑問に對して検討の努力を拂うべきである。オキシジミ、ダンペイキシヤゴの場合は營養價の問題でないことは殆んど確實であり、一方前期の宿井下、飯高兩貝塚におけるハイガイのように氣候條件によつて繁殖もし、また姿を消すような場合とか、海退現象の進行に伴つて生ずる變化も考慮される。云うまでもなく、後者は奥東京灣において明かにされたように、谷奥にあつては早く淡水化されるためシジミの貝塚が現われ、後期になると、かなり谷口までシジミの貝塚が見られる事實がその好例である。

更に食用以外の用途に利用される場合には特別な選擇が行われることも當然であろう。ペンケイガイは貝輪に加工されたものは屢次見られるが、食用殘骸と認められる場合は極めて少い。また今回飯高貝塚を發掘した際注意された處では、他の貝塚では貝層を形成する貝のうちで最も普遍的に見られるものゝ一つであるサルボウが食用にされた形跡がなく、貝輪としてのみ出土したのが注目される。しかし本節の主題として取り上げた諸例はこの點とも無關係であると思われる。それ故、如何に困難な課題であるとは云え、そのままに看過すべきでないことが知られるであろう。

(D) 貝の選擇捕食の理由については筆者もただ五里霧中の有様であるが、次に貝塚の貝類がどの程度の距離から採集されたか、という點に關しては、今回の調査が興味ある示唆を與えているように思われる。

現在の九十九里濱の海岸には外洋性のチヨウセンハマグリが多數棲息し、その發育も良好で、この海岸が生育適地であることが知られる。この傾向は往時にあつても同様であつたと覺しく、事實松尾町猿尾さるこにある猿尾貝塚は表面的な觀察ではあるが、大形のこの貝を主體としている。この貝塚は九十九里背後丘陵の末端に位置し、眼下に低地帯を見下す位置にあるから、當時の海岸線が今日より内方にあつた事實から推して、外洋に直面した海岸から、多量の大型のチヨウセンハマグリを容易に捕獲し得たものと思われる。ところが、栗山溪谷の奥部にある八邊貝塚はチヨウセンハマグリを含んではいるが、小形のものしか見られず、相當下流に降つた鴻ノ巢貝塚はそれと普通のハマグリとが等量程度混在して主體をなし、ほど近い牛熊貝塚もこれと様相を同じくしている。更に最も谷口に近い姥山貝塚ではA、C兩區ともチヨウセンハマグリが大半を占めるが、發育良好なものに乏しく、普通のハマグリも混在している。即ち、栗山川溪谷内の諸貝塚では姥山貝塚の如く谷口に近い貝塚にあつても、發育良好なチヨウセンハマグリは稀に見るに止まつて主體

を占めることがなく、猿尾貝塚とは全く様相を異にしている。これは溪谷内の内灣的性質を帯びた海岸はチヨウセンハマグリの棲息に適せず、従つて發育が不良であつたこと、更には各貝塚の居住者は自己の住地からあまり遠く貝を求めて彷徨することがなかつたことを示すものではあるまいか。貝塚から至近距離の海岸が貝類の採集地であろうことは、當時貝類の棲息量が今日からは想像しがたいほど豊富であつたと推定される以上、當然のことかもしれないが、またチヨウセンハマグリの出土状態から裏付け得るように思われるのは興味深い。しかし他方では貝類、特に一部の特殊な貝類が案外遠方から運ばれた可能性も皆無とは云えまい。海退の問題と共に詳述するが、姥山貝塚のように支谷の谷口まで一籽餘は離れていたと推定される場合もあり、チヨウセンハマグリと同様外洋性のダンペイキシヤゴが案外谷奥の貝塚において大量に発見される事實などは注意を要する。しかし姥山の場合は海岸が至近距離に求められないのであり、通常は、その貝塚の主體をなす貝類があまり遠方より運ばれたものでなかつた事實を認めて差支えなからう。最後に若し貝の採集が通常近距離に限られたとするならば、それに従事した者が老幼婦女子であつたとする推定も、また確率高きものとなるであらう。

(3) 編年と海退現象

栗山川の溪谷は九十九里地方では他に例を見ないほど奥行が深い。しかも谷内の標高は低く、海拔五米等高線は十二籽餘も内方に延びているので、往年大山史前學研究所が行つたと同様な方法を以て、貝塚と海岸線の後退現象との關係を検討するのに絶好のフィールドを提供している。またさきに概報を公にした九十九里沿岸の海岸低地に於ける研究の結果、⁽⁶⁾明らかになし得た、縄文中期には八米、同後期には五・五米等高線まで海水の浸入していた事實を再検討すると

共に、この成果を援用しつつ、溪谷内の貝塚を調査し、一應次の如き興味ある結果を収め得たのである。

(i) 現在のところ最奥の貝塚は十米等高線の末端に直面する尖底土器出土の貝塚であり、最も古い年代を與え得る貝塚である。(ただしこの貝塚は未發掘であるから、なお將來の検討を要する。)

(ii) 前期の飯高貝塚附近で借當川支谷の標高は約八米である。八百市場市字貝塚にある一小前期貝塚は丘陵脚下の標高が十米である。そこで前期の當時の海岸線は標高八米線を越え、十米に近かつたと思われる。前期において海進が大であつたことは、最奥部にある飯高貝塚において大形のチヨウセンハマグリが少量ながら檢出される點と關係があろう。

(iii) 中期では最奥の八邊貝塚前面の借當川支谷が七米弱を示すほか、適當な資料がない。しかし姥山貝塚では後期の貝層にシジミが伴うのに對して、中期の層では見當らず、鹹度の高いことが推され、この貝塚の近くに海水の浸入を見ていた筈であるから、七米を降るとは考えられない。結局低地遺蹟の調査から導かれた八米前後に置いてよかろうと思われる。また借當川支谷の大浦貝塚は發掘未了で詳細は明らかでないが、阿玉臺、加曾利E式を出す部分がある。その依存している小谷が借當川支谷に開く部分の標高が八米強であることは右の推測を裏書きする。

(iv) 後期の加曾利B式土器を出す貝塚は栗山川本溪谷の下流にしかみられず、牛熊と姥山の二貝塚であるが、前者は五米等高線を脚下に控えている。後者の場合は五米線は遙か栗山本流の谷口に行かないと見られず、至近距離の松尾から横芝に延びる砂洲内側はそれより幾分高いから、やや疑問が残るが、松尾横芝間の砂洲の内側が潟湖の状態を残して居り、その沖積、干涸が遅れたと假定すれば、そこに貝を漁ることも出來たのではなからうか。また兩者ともにシジミが現われて著るしく鹹度を減じている。これらを考按すると、この當時の海水の浸入限度は六米に達しなかつたと見て

よからう。

(v) 堀之内式の貝塚は最も多く、最奥の多古町千田貝塚は細長い小支谷の末端にあたり、加曾利B式の牛熊貝塚より約二軒上流にあつて、しかも五米等高線までは二軒を越える。大浦貝塚の堀之内層は確かに小形のハマグリを主體とするがこゝでは約四軒である。これらの事實から當時の海岸線をあまり降しては考えられない。鴻ノ巢、木戸臺、姥山の諸貝塚に於いても、五米線はあまり近くない。そうすると、加曾利B式に對するよりも、むしろ中期の貝塚に近いということになる。我々の常識からすれば堀之内式と加曾利B式の年代差をあまり大きく考えることは、困難のように思われるが、海退現象が常にコンスタントな進行狀況を示したのではなく、急激な何回かの變動によつて、斷續的に進められたものかもしれないから、このような結果が出て、敢て驚くには當らない。大地震に基づく土地の昇降が相當大であることが知られているから、それが當然であるのかもしれない。沖積作用による漸進的な海岸線の後退に加えて、地殻變動に基づく急激な變化を考慮に入れておかないと、編年乃至は文化の時間的差異を正確に捉え得ないこととなる。

さて上記の結果を総合すると次のように結論することが出来る。

- (i) 早期乃至前期の海岸線は現在の八米以上、十米等高線に近いところに推定し得る。
- (ii) 同様に中期は八米、後期の加曾利B式の時代は五米乃至六米、その前の堀之内式はむしろ中期に近い。しかして堀之内式と加曾利B式との間に、やや大きな海退現象を推定し得る。

(iii) 安行式當時の資料は甚だ少いが、低地遺蹟での調査結果では五・五米という數字が出て居り、この地區に於ける加曾利B式と大差がない。一部の地理學者の間に唱えられている安行式時代に於ける小海進現象は、(77)(8)ここでは確認出來

なかつた。

(iv) チョウセンハマグリの多少と發育の程度乃至は普通のハマグリとの混在状態を概観すると、谷奥におけるほど減少し、且つ小形であり、また時代が降るにつれて、同様の現象を示す。その事實は一に海退現象が我々の想定通りに進んでいたことを意味するものに外ならない。

また、右の結果を奥東京灣の諸貝塚に對して大山研究所が行つた調査の結論である、前期十三米、中期九米、後期七米に比較すると、相當大きな開きが認められる。この點に對する適當な解釋は只今見當らないが、關東造盆地運動が周邊地區ほど大きく、この地區の隆起運動量が奥東京灣より大きいらしい事實と關係があるかもしれぬと思う。

更に土器の既成編年との關係は、極めてよく一致し、矛盾を見ない。これは一部の人々から見れば至極當り前の事實で検討を試みることにすら愚劣であると見られるかもしれないが、各地方、各地區に於いて、自然現象の裏付を有するデータが揃えば揃うほど、編年の確實性が增大することは明らかで、我々はなおその努力をおろそかにすべきではないと信ずる。特に細かい點については(1)この研究に關する限り、堀之内Ⅱ式をある時間的な巾を持つた一型式として認めがたかつたこと、(2)阿玉臺、加會利E、堀之内三型式は阿玉臺、加會利E、及び加會利E、堀之内の組合せで混在する場合が多く、その間に大きな時間差を見出しにくい點など、十分注目に價すると思われる。

註

(6) 拙稿「九十九里沿岸に於ける低濕地遺蹟の研究 (予報)」史學二七―四。この論文で推定した縄文各期における海岸線の位置はその後多くの方々から疑問や示教を受けたが、今なお變改の必要はないと考えている。

(7) 例えば中野尊正氏「日本の平野」昭和三十一年。

(8) 本稿においては地理學者の所説に觸れることをさけた。今回は筆者の考古學的知見によつて編まれた見解をそのまま記述し、各方面からの示教を得たいと思つたからで、廣範に亘る検討は後日を期している。

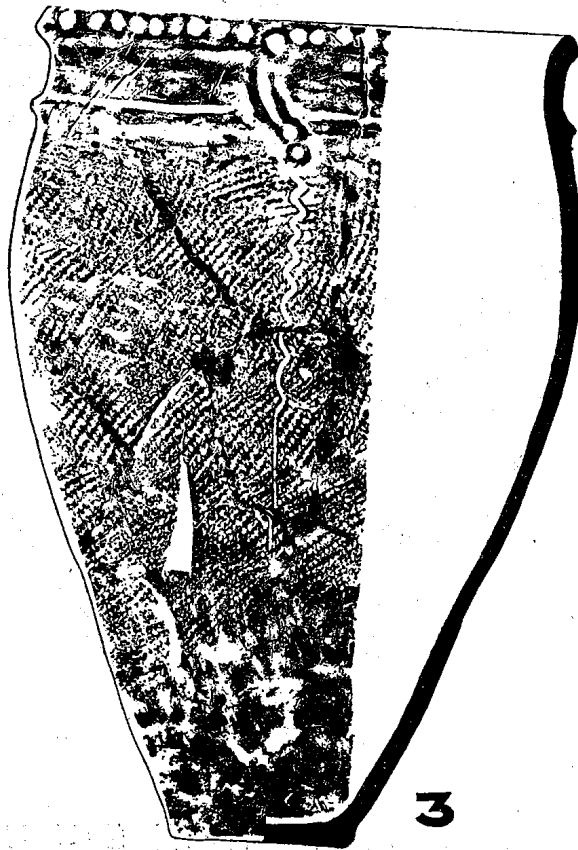
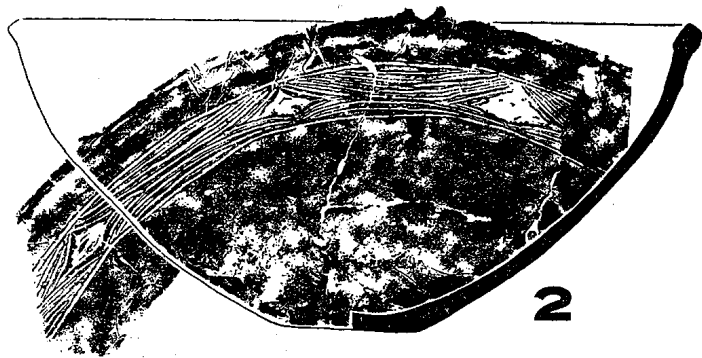
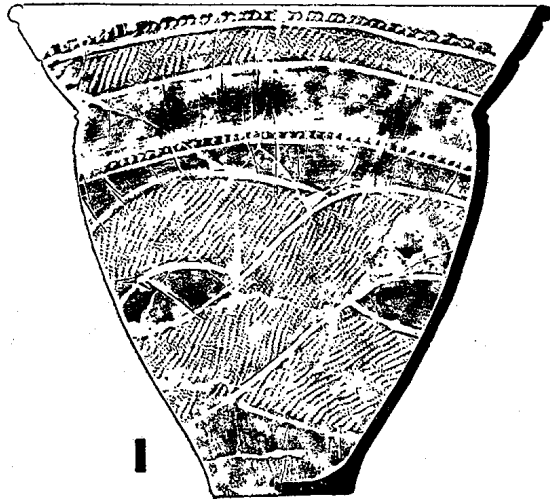
結 語

以上の成果は特に誇示するに足るものでもなく、また殘餘の諸貝塚の調査なり、他の自然科學との協同研究の進展によつて相當程度の變改を餘儀なくされるであろう。しかし、さきに發表した低地帯の諸遺蹟の研究と相俟ち、地域調査の一つのさゝやかな試みとして、それ自體の中になお幾多の問題を秘めていると思う。多くの方々の示教と援助によつて更に完璧を期したために筆をとつた所以を重ねて明かにし、諸賢の批判を請うものである。

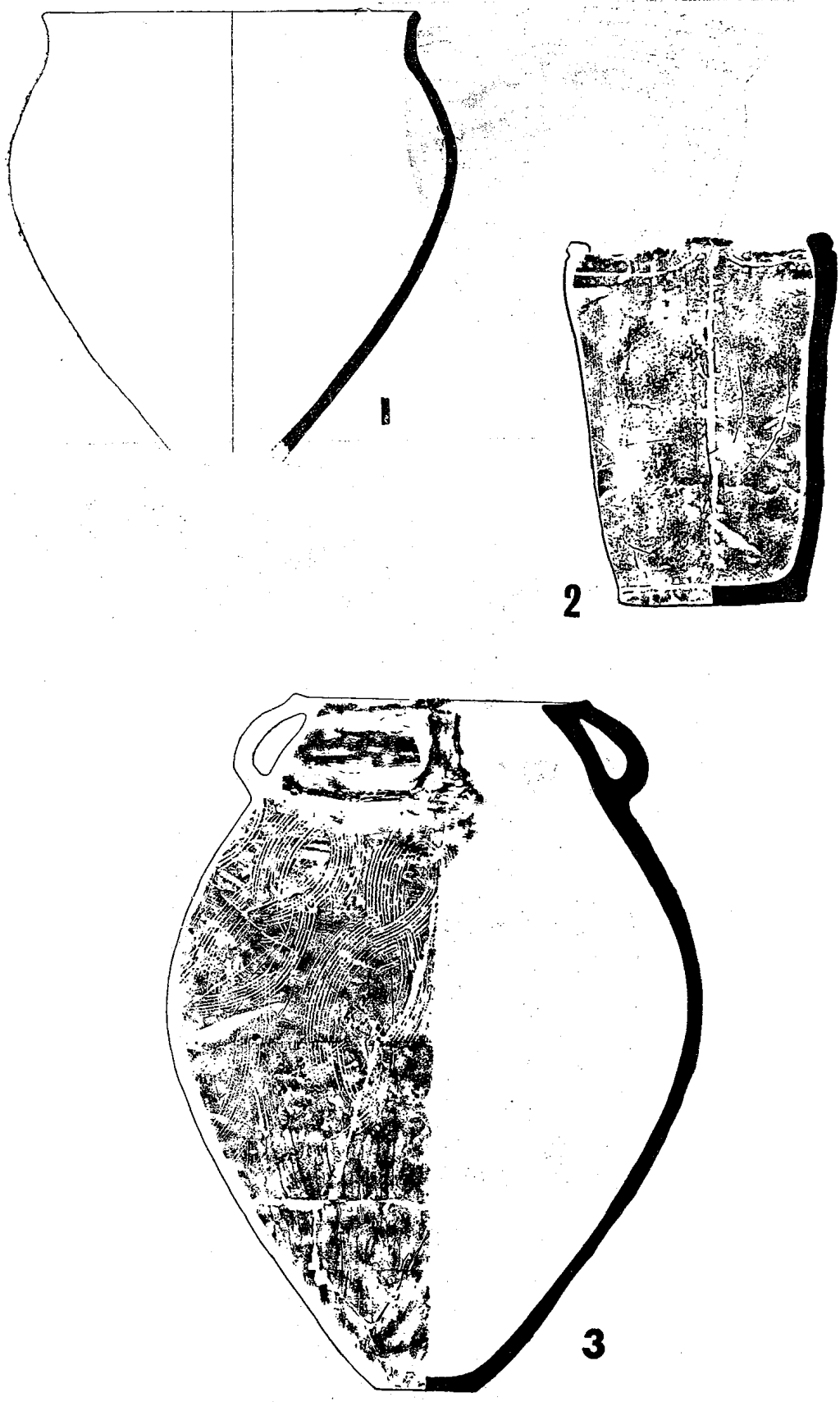
最後にこの研究に對して懇切な配慮と支援を惜しまれなかつた松本信廣教授に對して、改めて感謝を捧げる。また米山桂三教授をはじめ九十九里調査委員會の諸氏、その他支援を與えられた各位に感謝すると共に、發掘調査に協力された鎗田欣治、竹下次作兩氏並びに本塾考古學研究室の関係者諸君、特に櫻井茂隆、青木謹爾の兩氏をはじめとする地元の援助者各位に深甚な謝意を表したい。本研究を進めている間に、考古學の研究が廣く多方面の助力を俟たなければ満足すべき結果を得られない自明の理を、今更の如く教えられたからである。

(一九五七・十一・一稿)

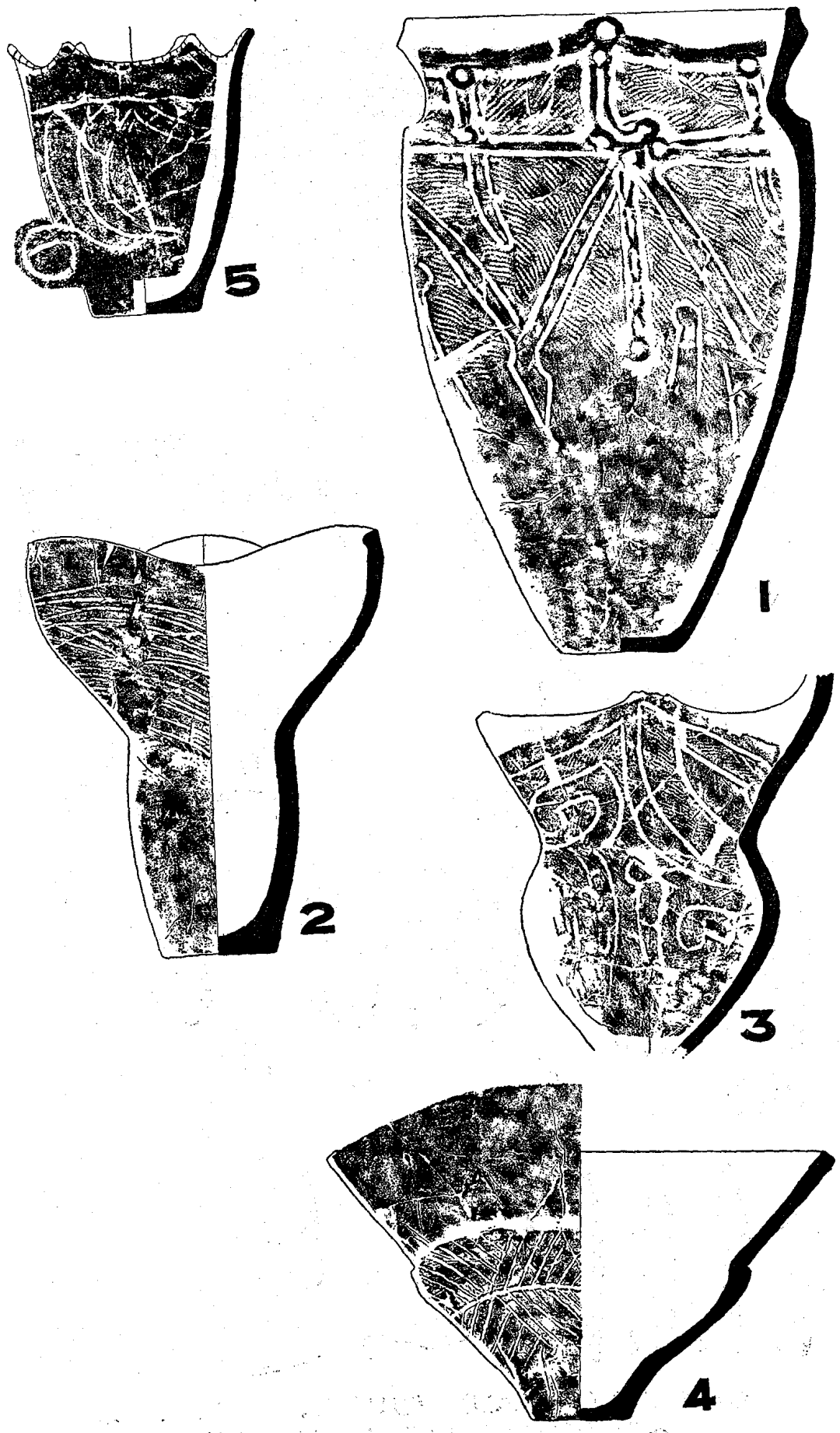
追記 出土遺物の實測圖は近森正、町田公雄兩君の助力によるものであることを明記する。



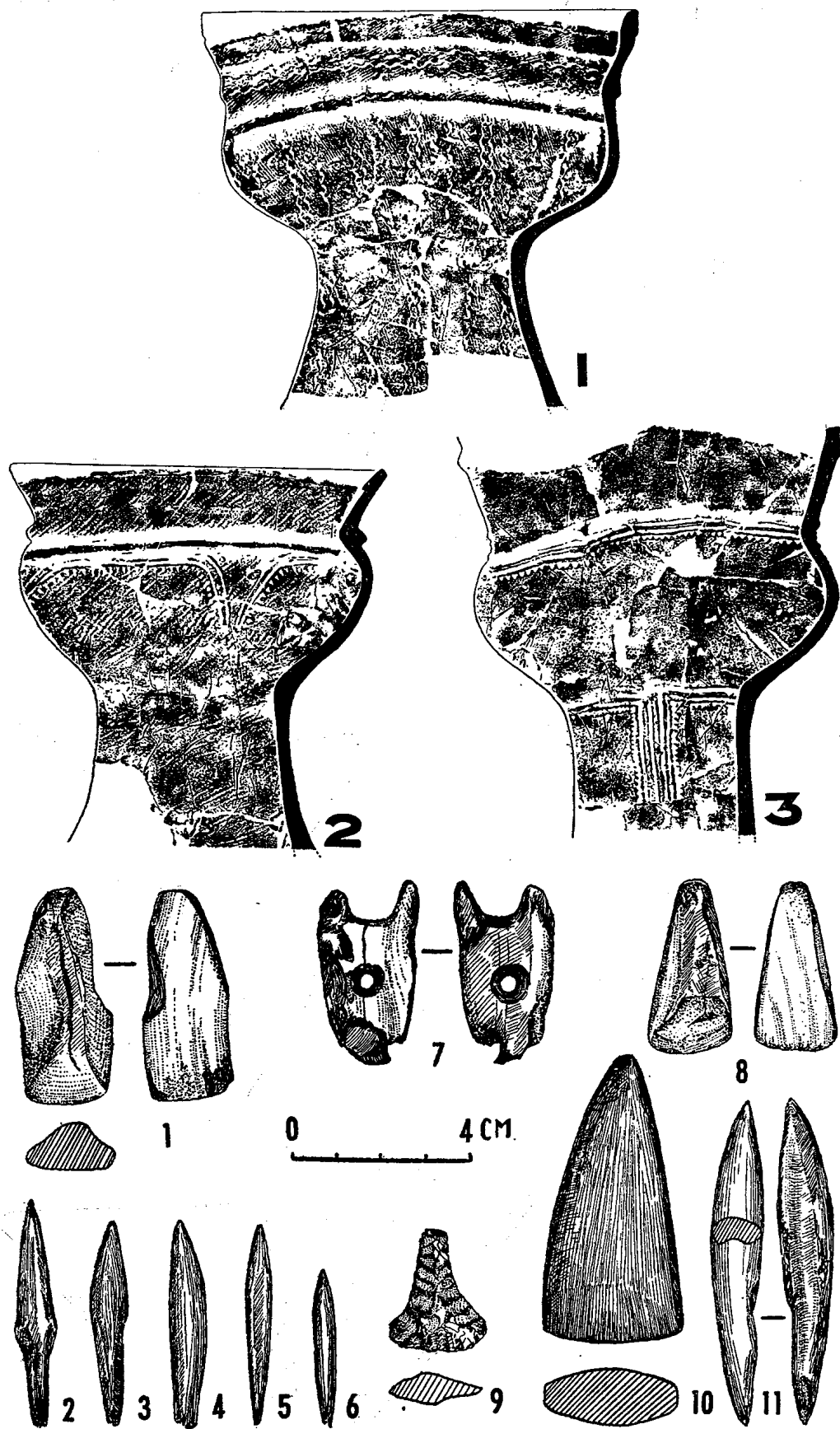
第2図 (1牛熊 2姥山 3鴻ノ巣) 縮尺 $\frac{1}{6}$



第3圖 (1 姥山 2 八邊 3 鴻ノ巢) 縮尺1・3 1/6, 2 1/3



第4図 (1, 4 姥山 2 牛熊 3・5 鴻ノ巣) 縮尺 $\frac{1}{5}$



第5圖 上段(1~3八辺) 縮尺 $\frac{1}{3}$, 下段(1牙斧 鴻ノ巣
2~6骨角製尖頭器 鴻ノ巣, 7·8猪牙製品及牙斧 姥山
9·11 筥状石器及骨製尖頭器 八辺, 10小形石斧 牛熊)